

<b>Title</b>	「悲嘆からの再生「自死で遺されたものの心の叫び」：スピリチュアルケアの視点から」 窪寺俊之氏（聖学院大学大学院教授 聖学院大学人間福祉学部こども心理学科長）（認定 NPO グリーフケア・サポートプラザ東京都助成事業主催 2015 年度 定期講演会報告）
<b>Author(s)</b>	木下，元
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.3, 2016.3 :32-32
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5737">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5737</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

認定 NPO グリーフケア・サポートプラザ 東京都助成事業 主催 2015 年度 定期講演会報告  
「悲嘆からの再生「自死で遣されたものの心の叫び」—スピリチュアルケアの視点から—」  
窪寺俊之氏（聖学院大学大学院教授 聖学院大学人間福祉学部こども心理学科長）

2016年2月6日（土）、日本基督教団銀座教会の東京福音会センターにて、本学カウンセリング研究センター長である窪寺俊之教授による講演が行われた。自死遺族の方々など約100名の参加者で会場は満席となった。3月末で専任としての教員生活を終える窪寺教授にとって、多くの方々の癒しになるスピリチュアルケア研究の視点を広く伝えるべく、新たな活動の一端となった。

### 【1】スピリチュアルケアの視点

まず、シシリー・ソンドースによる1967年のホスピス開始から、エリザベス・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』の死へのプロセスについて解説された。最後は「神との取引き」をするというほどの終末期癌患者の苦痛や苦悩を除こうとする、「問題解決型ケア」からスピリチュアルケアの視点にたった「寄り添い型ケア」について、淀川キリスト教病院でのチャプレン勤務時代の話を変えながら話をされた。死んだら何処へいくのかという不安に加え、死を目の前にする人には深い罪責感が生まれ、精神的苦悩があることを説かれた。

### 【2】命の新しい意味付け

人生の不条理（人は有限→知識、理解、能力）について、自身の青年期の生活環境などを交えながら、人生の課題と向き合う大切さ、新しい人生の物語をつくる大切さ、また、与えられた命を輝かせることや、スピリチュアルな視点から自己と和解し、人生と和解するように見直すことが、スピリチュアリティの機能であり、自死回避のための一つのはたらきになると言われた。

### 【3】「きくこと」の意味

ここではご自身の子育て時代の反省点を交えながら、「きくこと」の意味を力説された。お二人の娘さんに接してきた生のは話は説得力のあるものであった。そして会場は明るい笑いに包まれた。

#### 1)「きくこと」の意味

- ①悲しみを分かち合える人がいる、癒される
- ②弱さを出せる→弱さをもつ自分を受け入れる

#### 2)「きく」ことのケア

- ①聞く（hear）：耳で整理しながら聞く
- ②聴く（Listen）：心で聴き恐れに共感
- ③訊く（ask）：心に触れる言葉を発見
- ④利く（sensitivity）：痛み願望を知る
- ⑤効く（effect）：自責感からの解放

### 【4】「千の風に」のスピリチュアルな視点

レジュメを通して、優しく穏やかで力強い視点、死後の世界の自由などが伝わってきた。

講演後、質疑応答が行われた。自死された遺族からの素直な発見と悔いが語られ、真摯に答えられていた。窪寺教授のスピリチュアル（霊的な）ケアによる人の最期の苦悩の緩和に人生を捧げたその想いが分かった。また、学問を超越した人間らしい弱さと優しさを表し、神さまとのやりとりが綺麗に重なる時間であった。一人でも自死を減らし、遣された者、また死にゆく者の苦痛を癒し緩和する力がスピリチュアルケアにあることをあらためて気づかされ、すべての参加者に温かい空気が流れた素敵な講演会であった。



（文責：木下 元〔きのした はじめ〕 聖学院大学  
大学事務局 学術支援部 部長代行）